

牧師所感：

高橋 進 氏の 死を悼む

ー 六本木男声合唱団 団員 ー

戦争によって年若い人が、命を奪われた悲しいニュースを新聞やテレビの映像を通して知る度に、居たたまれない思いをする。

この思いは遠い昔に起ったことではない。然るにこの思いは今、この瞬間、我々の間で起っているのである。ロシアとウクライナの戦争、イスラエルとヒズボラ（アラブ）の、いつ終るとも知れない戦争。悲しい限りである。

ところで先日、冒頭で見るところの、東京 六本木男声合唱団のメンバーであった高橋 進 団員（バリトン）の 逝去の知らせに接した。共に歌い、共に旅をし、共に交わった 相手で、悲しいことはない。同じ歳の九十一才であるので、私より先に 召されたか、という思いである。けれども御家族の皆様のお悲しみはいかばかりであろうか。

さて、上で記したように、年若い人の死は、理不尽に尽きる。戦争によって希望の未来が無惨にも奪われてしまったのだ。

ところで今健在の青少年よ、戦争による犠牲だけでなく、悪徳な薬品のために、命を落としてはならぬ。

おわりに聖書、特に旧約聖書のコヘレト（伝道者）12 章のことばを掲載する。

青春の日々にこそ、お前の創造主に心を留めよ。苦しみの日々が来ないうちに。

「年を重ねることに喜びはない」と 言う年齢にならないうちに。

太陽が闇に変わらないうちに。月や星の光がうせないうちに。

雨の後にまた雲が戻って来ないうちに。

その日には 家を守る男も震え、力ある男も身を屈める。

粉ひく女の数減って行き、失われ 窓から眺める女の目はかすむ。

通りでは門が閉ざされ、粉ひく音はやむ。鳥の声に起き上がっても、歌の節は低くなる。

人は高いところを恐れ、道にはおののきがある。

アーモンドの花は咲き、いなごは重荷を負い アビヨナは実をつける。

人は永遠の家へ去り、泣き手は町を巡る。 白銀の糸は断たれ、黄金の鉢は砕ける。

泉のほとりに壺は割れ、井戸車は砕けて落ちる。

塵は元の大地に帰り、霊は与え主である神に帰る。

なんと空しいことか、とコヘレトは言う。 すべては空しい、と。

コヘレトは知恵を深めるにつれて、より良く民を教え、知識を与えた。多くの格言を吟味し、研究し、編集した。コヘレトは望ましい語句を探し求め、真理の言葉を忠実に記録しようとした。

賢者の言葉はすべて、突き棒や釘。 ただひとりの牧者に由来し、収集家が編集した。

それらよりもなお、わが子よ、心せよ。 書物はいくら記してもきりが無い。

学びすぎれば体が疲れる。 すべてに耳を傾けて得た結論。

「神を畏れ、その戒めを守れ。」

これこそ、人間のすべて。 神は、善をも悪をも 一切の業を、隠れたこともすべて裁きの座に引き出されるであろう。

冒頭の 高橋 進 氏の 逝去の哀悼と共に、御家族の慰めを祈る。

先日の 11 月 13 日に亡くなられた 谷川 俊太郎 氏は、死に対して達観した先輩であった。

「自分が 90 年ぶりにおむつをはいている気分を恥ずかしがることなくさらけ出して、『老い』というものをどこまでも冷徹に見つめていた。『老いとか、衰えるとか、死ぬということも新しい体験で、今しか描けない体験なんだよ』と話していた」